

● イッソフノモウガタリ
伊蘇普物語

牧 羊 譚

其一、獅子と二十日鼠

一匹の獅子が、心地よく寝て居ると、二十日鼠がやって来て、五月蠅く獅子の顔の邊を駆け歩いて目を覺ませたので、怒るまいことか、不意起き上って鼠を引っ捕へて踐み殺さうとしました。すると鼠は、さも悲し相に謝って『もー生命丈けお助け下さる事なら、屹度御恩返しは致します』といひますので、獅子は なーに、鼠のくせに何をいふかと云ふ風に笑ひながら宥してやりましたこの事がわってから暫くして、この獅子が 獵人の罠らへた係蹄に引っかゝって、太い綱で身動きも出来ぬ様に縛られたもんだから、さすが獸の王

も何事も出来ないで、たい大聲で吠えてばかり居ました。その聲を聞きつけて、以前の二十日鼠が出て来て、其綱をしきりと噛り切つて、とうとう獅子を助けて、さて、申しますには、『先日、お前さんは、私の様なものから恩返しなどを受けない積りで、いつか私がお前さんを助けることもあらうといったのをお笑ひなすつたじゃありませんか、今こそ、お前さん、二十日鼠だつて獅子さんを助ける力があることが、お分りになつたでしょう』。

其二、狼と仔羊

狼が或晩羊小屋から迷ひ出た一匹の仔羊に出遭つて、すぐにも、捕つて食はうかとも思つたけれども、何か、自分が仔羊を取つて食う丈けの權利があることを知らせて置いて、とても食はれても仕方がないと諦めさせてからにしやうと思つたから

次の様に咄しかけました『小夜さん 去年だったか、お前さん大變僕を輕蔑した事があつたけね』すると仔羊は さも悲し相に申しました『マー、あんな事を、だつて妾其時まだ生れてなかつたのだわ』これは失敗つたと思つて狼は又『そーくお前さん いつも僕の所の草を食つて行くね』といふと仔羊は『あら、まわ、妾まだ草なんか食べられないのよ』狼は又やり損つたと思つて今度は、『そーだつた、お前さん 僕の所の井戸の水を飲みに来たけね』といふと『いーえ、妾水なんかまだ飲まないわ、だつて母羊さんのお乳があれば、外に食るものも飲むものも要らないのよ』そこで狼は恐ろしい目を光らせて、不意仔羊を引つ捕らへて、たゞ一口に食べて仕舞つた、で獨り言を言つて居ます、『マー、いーや、お前さんは、そんなに一々

辨解はしたけれど、どの道僕は夕飯なしには濟まされないからね』

悪人は悪い事をするに、何か知らん口實を見附け出します。

其三、驢と鈴虫

鈴虫が毎晩く善い聲で鳴いて居るのを、驢が大變に感心して聞いて居ましたが、どうかして自分もあんな善い音楽を歌う様になりたいもんだと思つて、鈴虫に、一体何んな食物を食べて そんな善い聲になつたかと 聞いた所が『露ですよ』と皆の鈴虫が答へました。そこで驢馬は、露ばかり食べて 他の物は一切食べないで居りましたが、すぐとお腹がベコクになつて餓死した相です。

(以下次號)